

「大坂の史跡を訪ねて」連載28回目

大阪城周辺(その7)

オサタニ ヨシハル
長谷 吉治

※前回に引き続き「大阪城周辺」をご紹介します。

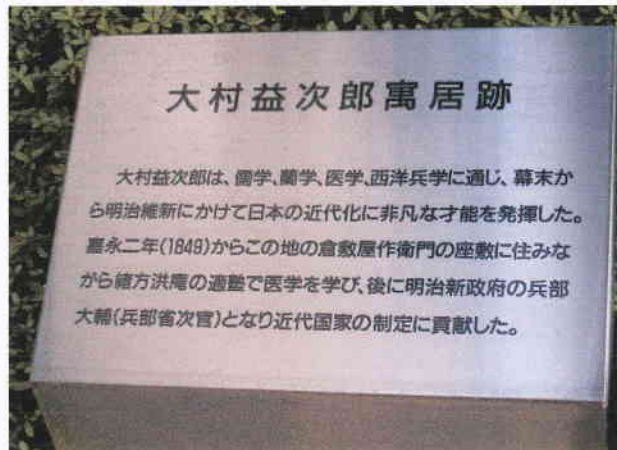
ろうげつあん

1 大村益次郎寓居(漏月庵)跡

大阪府中央区徳井町1-2-2

- ▶ 大村益次郎は、文政8年(1825)周防国吉敷郡鑄銭司村に生まれました。大村益次郎が村田良庵(すぐ後に蔵六と改名)と名乗っていた弘化元年(1844)、22歳の時来坂し、緒方洪庵の適塾に入門しました。入門当時は塾内住み込みで畳1畳分しか与えられず、日夜勉強に励んでいたようです。一旦、長崎へ行きシーボルトに学びますが、嘉永元年(1848)再度適塾に戻り、塾頭を命じられます。嘉永2年(1849)4月、塾を出て倉敷屋作右衛門の座敷に移り住み、ここから塾に通いました。

大阪市西区にある大村益次郎寓居(倉敷屋作右衛門の座敷)跡 大阪市西区江戸堀2-6



しかし、この倉敷屋作右衛門の座敷に住んでいたのも短い間で、善庵筋に家を借り、この地へ移っています。大村益次郎はこの家を「漏月庵(ろうげつあん)」と命名しました。この漏月庵については、司馬遼太郎の小説「花神」(上巻P94~95/新潮文庫)で、次のように紹介されています。

蔵六は開業もしていないのに患者を診ることは好まない、とってなるべくことわったが、倉敷屋の娘のお町というのが社交家で、人に頼まれてきては蔵六に患者を押し付け、しかもまめまめしく助手の役目までしたために蔵六は小うるさくなり、「思うところがござって」と、作右衛門にことわり、一月ぐらいでこの家を出、上町の徳井町に借家を借り、そこへ移った。

蔵六の住んだ町の上町の徳井町というのは、いまは東区(注:現中央区)徳井町という。蔵六は、かれがうまれてはじめて一ツ家のあるじになったことを愛して、「漏月庵(ろうげつあん)」と名づけ、老婆を一人やとい、ここから適塾にかよった。

(途中省略)

蔵六がはじめてこの家に入った夜は月がとびきりあかるい夜で、寝ころんでいると、軒のひさしの破れから月がみえた。それがひどく気に入って、そう命名した。

また、肇書房から出版された大村益次郎先生伝記刊行会の編集による「大村益次郎」には次のように記載されています。(P116)

大村子爵家の「聞書文庫」によれば

「嘉永二年閏四月朔日適々齋塾より江戸堀四丁目伊藤屋敷前の倉敷屋作右衛門の座舗に外塾す。同閏四月廿八日上町錢南筋徳井町に轉塾す。漏月庵と號す」と見えてゐる。

先生は嘉永三年歸郷まで前記の所に住居して、適々齋塾に通ひ、塾生の監督・

訓育等に當った。
昭和十八年六月三十日大阪の大村卿遺徳顕彰會では、有志相計り、高さ四尺の花崗岩に基を左の適當の場所に建碑せられたのである。

大村益次郎先生寓居地址（西区江戸堀北通三丁目弁護士黒木勝一氏宅附近）

大村益次郎先生漏月庵址（東区徳井町一ノ一山崎徳次郎氏宅附近）



大村益次郎寓居(漏月庵)跡 ※戦前には石碑があった



大村益次郎

2

後藤象二郎ゆかりの地

舎密局(せいみきょく)跡

大阪府中央区大手前3-1

- ▶ 舎密はオランダ語シェミー(化学の意)の当て字です。当時の大阪府知事 後藤象二郎は、富国強兵には理化学の教育振興が重要だと考え、明治2年(1869)5月、オランダ人ハラタマを招いて大阪では初めての公立学問所を開校しました。
最初の生徒はわずか5名だったそうです。
明治22年(1889)京都に移転。第三高等学校を経て、京都大学となりました。
当時からあった楠が、現在も残っています。



第2代大阪府知事 後藤象二郎

[任期:慶応4年(1868)7.12~明治2年(1869)2.4]

後藤象二郎は土佐藩出身。暗殺された吉田東洋は義理の叔父にあたります。

後藤は藩の参政となり活躍します。大政奉還の実現に向けて坂本龍馬とともに奔走します。

王政復古の号令の後には参与に任じられ、大阪府知事、左院議長、参議を歴任しました。

初代大阪府知事醍醐忠順[任期:慶応4年(1868)5.2~同年5.23]が離任後、一時後藤象二郎と小松帯刀が府事管理として知事の代行を務めました。慶応4年7月、後藤は第2代大阪府知事に任命されました。



後藤象二郎

3 豊臣期大坂城三の丸の石垣/追手門学院小学校

大阪府中央区大手前1-3-20

- ▶ 豊臣秀吉は自ら死期が近いことを悟り、大坂城の三の丸の普請工事を命じます。そのときに使われた石垣が現在でも残っています。追手門学院小学校では、改築工事の際、地下から当時の石垣が発掘され、地下にある職員駐車場で石垣を見ることができます。(一般公開はされていません)しかし、石垣の一部は同校東門の前に移されているため、いつでも見ることが可能です。



追手門学院小学校東門付近にある豊臣期大坂城三の丸の石垣

<石垣の築き方>

- ①野面積み (のづらづみ) : 自然の石をほとんど加工せずに積み上げた石垣。7世紀後半に始まり、中世の石垣は野面中心であり、近世においても費用や工期の都合により採用されています。
- ②打ち込みはぎ : 石と石の接合面を打ち砕き、石垣の表に出る隙間を少なくしたものです。16世紀後半(桃山時代)から多用された積み方です。
- ③切り込みはぎ : 石と石の接合面を整形し隙間をなくしたもの。17世紀初期に登場し、現存する城はこの時期に多く作られ、この3種類の方法を併用しています。

豊臣期の大坂城は主に野面積みが行われ、徳川期の再築時には大半の城壁は打ち込みはぎ、角石や楕形の部分は切り込みはぎで造られました。現存の大坂城石垣には野面積みはまったく見られません。

4 徳川期大坂城の石垣/日本経済新聞

大阪府中央区大手前1-1-1

- ▶ ここにある石垣は、昭和55年2月に行われた社屋建設工事の際、敷地内地下室から発見された石垣が移築されたものです。調査の結果、石材はすべて大阪城の現存する石垣と同じ花崗岩で、諸大名の家紋などを示す刻印も見つかっています。元和6年(1620)、大坂城再築時に城北の惣堀に見立てた旧大和川と淀川との合流点付近の旧大和川左岸の護岸用石垣として築かれたものです。

No.3およびNo.5の豊臣期の石垣と見比べていただくと、この徳川期の石垣の築き方が違うことがお分かりいただけると思います。



5 豊臣期大坂城三の丸の石垣/ドーンセンター

大阪府中央区大手前1-3-49

- ▶ ドーンセンター(大阪府立女性総合センター)にも豊臣期大坂城三の丸の石垣が見られます。
平成元年(1989)、ドーンセンターの建設に伴う発掘調査で、石垣が発見されました。
地下約2mのところ、東西21mにわたって発見され、これまで見つかった豊臣期の石垣の中では最も残存状態の良いものでした。

